

日光山輪王寺伝来胴着三領並びに

それらの修理及び復元模造について 上

神 谷 榮 子

内 容

- 一 はじめに
- 二 日光山輪王寺伝来胴着三領
 - (1) 白麻地波文様胴着
 - (2) 三つ葉葵文様藍型染胴着
 - (3) 金入縞珍胴着（以上本号）
- 三 金入縞珍胴着の修理
- 四 白麻地波文様胴着と三つ葉葵文様藍型染胴着二領の復元模造
- 五 結び

一 はじめに

日光山輪王寺には、徳川家康の二十一回忌に当る寛永十三年四月十七日の「日光山東照社二十一回神忌（家康遠忌）」に演じられた舞楽註1の装束が、大型長持に満杯に詰って十個分、今に伝えられている。それらの舞楽装束は、この二十一回神忌のために一式調製されたもので、事実それらには一貫して江戸前期の古様をそなえた染織・服飾上の確たる様相が見られる。それら日光山輪王寺蔵の舞楽装束に関して昭和五六年一月二四日から一月二九日まで開催された東京赤坂のサントリー美術館での「日光山輪王寺舞楽装束展目録」に示し、述べたところである。そ

日光山輪王寺伝来胴着三領並びにそれらの修理及び復元模造について 上

のサントリー美術館での展覧会后、筆者は五回、延べ十八日間、輪王寺に趣いて調査を続行しているが、それらの舞楽装束は、昭和五十八年六月六日、一括して重要文化財に指定された。

さて、表題の胴着三領は、これら輪王寺伝来の舞楽装束と共に、その大きい長持の一つに入れられて今日に伝えられて来たといわれる。これらは三領とも胴着と称されて伝えられており、事実、舞楽装束ではない。それにしても何故にこれら舞楽装束と一緒にして伝えられて来たのかを考えると、「恐らくは演じる人達が、待つ間にでも着たり、羽織ったりしたものではなからうか。」という意見に達した。しかしそれは、現代から推測する想像であって、あくまでも用途は不詳であるといわなければならぬであろう。

これら三領の胴着と称される衣料は、舞楽装束とは類を共にするものではないが、しかし時代的には共に伝来する日光山輪王寺の舞楽装束と同時代の染織品であり、衣料である。江戸前期の染織品、服飾品の特徴を明らかに示している。

即ち、舞楽装束に見られる、桃山期から二、三十年時代を後にした江

戸前期の染織品、服飾品の諸様相がこれら三領の胴着にも、それぞれに確認される。織において、桃山時代には外来裂模織の域を殆ど脱し得ていなかったものが、この期には、文様面・織技面それぞれの躍進が顕著に認められ、それらはすでに外来織技を体得し、外来文様をも早や消化してわが国独自の文様として展開を始めている。こういった寛永十三年出来の舞楽装束に見られる染・織・繡・文様の特性と、衣料としての形態が、桃山期の身幅が広く、身丈の短いものから江戸期の細身・丈長への移行への兆しが、これら三領の胴着にも明らかで、また(1)白麻地波文様胴着、(2)三つ葉葵文様藍型染胴着の二領の文様及び染の技術も江戸前期の特性が認められる。更に朽損の著しい(3)金入繻珍胴着にも、形を整えるにとどめた修理の後の形態や、織、文様などから、明らかに江戸前期の特性が観察される。これら三領の調査から、(1)、(2)の胴着の復元模造計画に進展、美術研究三三二号の拙稿片倉家伝来の重文小紋胴服の修理及び復元模造に従事したスタッフ、即ち筆者、松原中形藍染工房の四兄弟、共立女子大学家政学部被服学科の栗原弘子教授と河村まち子助教教授がそれに当った。^{註3}

なお、何かと山辺知行遠山記念館附属美術館長には、御相談に乗っていただき御指導を仰いだ。

日光山輪王寺伝来胴着 形状・法量一覧表

	衽	裾	背割レ 裾脇アケ	中入縮	組	細用の乳 三角裂	袖の形	a	b	$\frac{b}{a}$	襟肩アキ $\times 2$	d 衽下立襷	e 立襷	f 衽幅	g 合襷幅	h 前身幅	i 衽	j 袖口	k 襟幅 (襟折返し側)	l 袖丈	m 身丈	重量	
								袖幅	後身幅														
(1) 白麻地波文様胴着	有	ナシ	ナシ	単衣	有	ナシ	筒袖	31.5	35.5	—	16.0	—	—	20.5	19.5	—	35.0	—	20.5	12.0 (外側)	29.0	90.5	240g
(2) 三つ葉葵文様藍型染胴着	有	ナシ	ナシ	縮入	有	ナシ	筒袖	34.5	肩31.0 裾40.0	—	20.0	—	—	22.0	—	38.0	—	65.5	20.0	12.5 (外側)	36.0	91.0	600g
(3) 金入繻珍胴着	有	ナシ	ナシ	袷	欠	ナシ	筒袖	33.0	33.0	—	19.0	—	—	18.0	—	40.0	—	65.0	19.0	不詳	37.0	93.0	390g

(寸法の単位はcm)

二 日光山三輪王寺伝来胴着三領

(1) 白麻地波文様胴着

いわゆる寛文模様の先駆の様相が明らかかな意匠である。江戸の前期、万治から寛文にかけての小袖模様の意匠構成に、その流行の頂点を見せる意匠で、小袖の前身、後身それぞれの着装上の効果を念頭におき、正面も背面も大きく弧を描いて模様を片寄せ、模様と地(空間)との対照美の効果をねらった大胆なデザインが、その寛文模様の特色であり、この胴着の意匠は一見してその初期的な構成が窺われる。寛文模様を構成する曲線部分には屢々澆とも思える勢のよい流水と波頭が見られるが、この胴着の波模様には流水の勢は不足ながらも、蕨手状の波頭の躍動で模様全体は生氣に溢れている。それらは寛文模様初期の模様構成上の幼稚さを具現しながらも、しかし活力に満ちた秀れた意匠を生じさせたもので、寛文模様初期の秀逸な作例といえる。こういった意匠上の点からも、輪王寺伝来の舞楽装束と同時代、即ち寛永十三年頃の作例と見做して妥当であろう。

(縫目)も〇・三センチ前後。

背縫一本だけ(一度縫い)の平縫(単衣物の背縫は二本平縫をして強度をはかる場合が多い。)で、針目(縫目)は〇・三センチ前後。背縫代も〇・三センチ前後。背縫の折り被せは今日でいう正常(美術研究二二八号二〇頁拙稿の「挿図3」のオモテ参照)。

両脇縫—縫代〇・三センチ前後の平縫の一度縫い。針目も〇・三センチ前後。衿附—衿附は袋縫、針目は〇・四センチ前後。

襟及び襟附—襟の形状は挿図3の背面図下方の向って左側図照合、図版Iで見られるように、黄土色地に魚、貝、水藻、雲文等の文様が金・銀糸も入った糸糸で織り出されている縹珍裂で附けられている。上前と下前の衿の襟首側につけられている組紐は安田打で、襟と同色の黄土色地に燃金糸が縹文様状に組み込まれている。その組紐は二センチ幅で、半分に折り曲げられ、襟首周りの衿部分巻き込むようにくるんで飾っている。その先には上前には一センチ出たところに紫の安田打紐でくるんだ釦がついており、下前には上前同様に一・四センチばかり張り出た白絹糸の燃紐の先端に白平絹のくるみ釦がついている。上前は、肩山に近い襟首から縫いつけ、下げられた紫、萌黄、燃金糸を三つ組にした組紐の乳に掛けてとめるようになっており、下前は、下前衿の先端につけられた白平絹釦と共裂の白平絹乳(中に綿が入れてあり釦を受ける乳として安定がよい)よう細心の配慮がなされているが、上前の乳の位置と対称的な位置に、但し下前の衿の端についた釦を受けるものであるから、胴着の裏側に縫いつけ下げられている(以上、図版Iの襟首周り部分、挿図1b・c照合)。

裾—三つ折ぐけで、くけ目は〇・四〇・五センチ。

紐・紐附—紐は全長二二七センチで右身側に一一四センチ、左身側に一一三センチ背縫の襟附から三九・五センチ下った位置に紐の上端(「わ」になっている)が附けられている。紐幅は三・八センチで、縫目が下。紐附は背縫の上に紐を置いた形で、背縫の縫目の上の「きせ」分のところに〇・三センチ前後の針目で一筋縫いつけてあるだけ、至極簡単な附け方である。

縫糸は、白のS撚絹糸である。縫目(針目)は平縫が〇・三センチ前後、く

け目が〇・五〇・七センチである。

(布幅・地合・地質・重量)

用布の幅は三七センチ前後で、この上布の地質は相当に上質で、密度は一センチ間に、縦糸が二八本前後、緯糸が三四越前後である。附紐の上布は、糸の質がさくられた感しで、痩せてもおり光沢も張りも欠乏している。上質とは決して言えない。身とは別の裂地であることは明らかである。密度は一センチ間に、縦糸が二四本前後、緯糸が二〇越前後である。

(襟裂)

黄土色地に、魚貝雲文文様金銀糸入り縹珍裂、地は縦の五枚縹子地で、経糸、緯糸共に黄土色。地合は、密度が一センチ間に、経糸は一〇〇本前後、緯糸は二五越前後。絵緯は、薄白茶、空色、緑、黄色、薄萌黄、萌黄、金箔糸、銀箔糸が使用されており、文丈は不詳(但し二四センチ以上^{註4})、窠間幅は一一センチである。

(重量)

二四〇グラムである。

(2) 三つ葉葵文様藍型染胴着

徳川家の紋所の三つ葉葵紋が、四方連続文様となって展開している藍染の胴着で、比較的部厚に綿が入った仕立である。型紙使用糊置防染で文様が表わされている藍染。

わが国では近世初期以降今日に至るまで、こういった型紙使用の四方連続文様を、麻地や絹地、木綿地に実に見事に施して衣料等にたくまざる多種多様な文様をつけて来ている。その文様の形、単位、組み合わせの巧みさ、展開の見事さ、更に、衣料としての目的に程よく適合して文様自体に裂地との一体感を持たせているなど、多種に亘る文様が作られているにもかゝらずそれらが大きい場合、右に挙げたような条件を具

えていて、型染の特性を十分に活かした優れたものであるなど驚異に値する。

わが国のそういった衣料用型染文様の特性を、型染衣料としてはわが国の遺品資料中、比較的古い時代に属するこの胴着は、更に三つ葉葵を組み合わせて構成するといった、連続文様の素材としては、いささか取扱いが容易ではないものを連続文様の繋ぎとして、便化した菊花と二本の筋を組み合わせる手段をとった、一応は何か連続文様構成として成功している点、評価してよいのではないかと思われる。

こういった意匠上の幼稚さが感じられる点からも、(1)白麻地波文様胴着とほぼ同時代と見做してよいと思われる。

胴着としての形状(写真―図版Ⅲ、Ⅳ、挿図4 a、5、実測図―挿図6―参照)から見ても、(1)の単衣胴着とほぼ同時代と看做してよいであろう。

(染色)

生地は白の平絹で、ほころびの部分から数ヶ所観察したが、用いられている裂地は、片側が織耳であってもその反対側の裂端は裁ち目で、何処にも両耳の裂である

a 正面全図(襟を折って着装する時)

b 上前裏面と下前の説明

c 正面前合わせ釦説明

挿図4 (2) 三つ葉葵文様藍型染胴着

各々の法量は表の(2)と実測図(挿図6)照合。各部所の縫製等、実測図にも或程度示したが、記入しきれない部等は図示説明によらないが、可能な限り平明に理解が容易なように努める。

この胴着は、綿入れの仕立で、先ず、表裂の縫い合わせ、裏裂の縫い合わせをそれぞれに行った上で、表と裏の裾の縫い合わせが行われたと思う。表裂の裏面全体に綿を置き、その上に裏裂側をかぶせるように置いて、要所を仮綴じ、裾、袖口、衽の端等、表に返した時の状態を想定して表裏の釣合を加減しながら裏の

部分は見つけ出されなかった。それで、これは並幅の裂地を用いたのではなく、片倉家伝来小紋胴服(美術研究三〇三号抽稿)や日光東照宮蔵小紋胴服(美術研究三〇三号抽稿)のような外来裂の大幅の平絹地を用いたのではなからうかと推測する。

従って片倉家伝来の重文小紋胴服や日光東照宮伝来の重文小紋胴服と同様に、外来裂の大幅の裂を幅の広い板の上に型付して行ったものと考えられる(美術研究三三二号抽稿二四頁参照)。

型紙の大きさは、幅は「大幅の裂幅一杯」以上で、型紙の長さは文様部分が一〇・七センチ(曲尺で三寸五分)となる。その型紙で、片倉家伝来小紋胴服(美術研究三〇三号一、一二頁の型付照合)や日光東照宮小紋胴服(美術研究三〇三号一五、一六頁)と同様の型付が行われたと思われる(美術研究三三二号二四頁)。即ち、型紙は、幅が文様部分の幅が四二センチ以上で、長さは文様部分の長さが一〇・七センチ(曲尺で三寸五分)、型付をする時に裂地を伸ばし張り付ける長い板も、通常のものより幅が広く、少くとも五〇センチ前後は幅のある広い幅の長板が準備され、型付は幅一杯を一手間の型送りをして進行したと想定される。

防染の糊置は片面であることが、この胴着のほころびの個所から裏面が観察され判明。糊が乾いた後、藍に浸染されている。水洗し、仕上げ、文様部分が表側は明瞭に、裏面は藍がまわっているので不明瞭に出ている。

(形状・仕立)

ち目になっている。

花鳥唐草文様色入金襦の別襟がつけてあるが、身頃の表側に縫いつけてある襟は、折り被せが身頃が上になっており、身頃の裏側に縫いつけてある襟は、折り被せが襟が上になっている。即ち襟付の折り被せは表側と裏側では逆になっている。この方法は襟裂が身頃の裂地より多分に厚味があるので、縫い合わせの縫代が重って部厚くなるのを避けるために採られた方法と考えられる。

前身頃の打ち合わせは上前、下前ともに(1)白麻地波文様胴着と同様の釦と乳で留めるようになっていて(挿図6の背面、上前、下前の襟首囲り、及び挿図1の上前、下前の襟首囲りの図、及びそれら二領の写真図版、写真挿図の襟首囲りを照合されたい。)

前合わせの襟首囲りの衤上部、釦に繋る装飾組紐(その部分の補強も兼ねている)と、上前、下前の釦を留める乳は同一の紫に燃金糸入り安田打紐である(図版Ⅲ、IV、挿図4a、4c、4b)。打合わせの衤上部の、上前には○・四ミリのいせ込み(ゆるみ)が入れてあり、着装した時の上前の落着き具合を考慮してある。そのいせ込みを入れて、この安田打紐を二つ打りにしてくるのであるが、装飾と実用が真によく計算されている。この安田打紐の幅は約二センチで、二つ折りにしてくるのであるので、見た目の縁飾り幅は一センチ弱である。釦を受ける乳は、上前釦を受ける右身外襟肩から下げた分も下前釦を受ける左身内側から下げた分も(挿図6背面

挿図5 (2) 三つ葉葵文様藍型染胴着 背面

釣合がうまくとれるようにする。そうした綿入れ作業をしてから表に返し、中入綿を整え、仕上げるのが綿入仕立のあらまじだが、この綿入胴着の場合、南蛮風な形態が採用してある襟付や前合わせ等には、それなりの工夫がこらされている。

背縫の折り被せは、表も裏も、今日でいう正常とは逆(美術研究二二八号二〇頁拙稿の「挿図3」参照)になっている。背縫は、表裂も裏裂も織耳ではなく裁

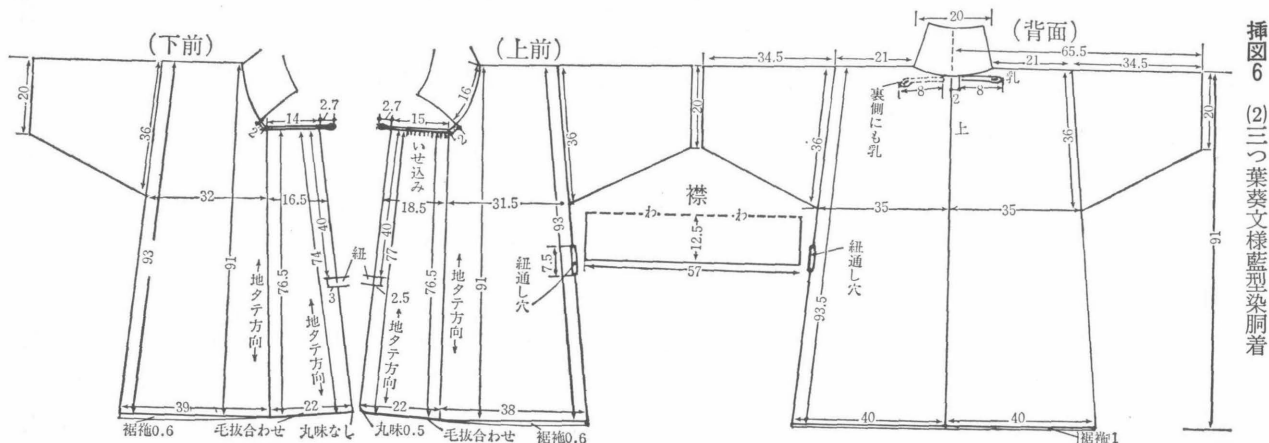
照合、この二センチ幅の安田打紐を二つ打りして、くけて厚い一本の紐にしたのを使っている。その乳にはめる釦は上前も下前も、黒に近い濃い色の杉綾の織目の見える裂で包んだくるみ釦である。その上前の釦を包んでるのは、紫に燃金糸入りの安田打紐と同質のものかも知れない。磨かれたために色や光沢が変わって定かでない。

釦や乳の素材や形、位置は多少は異なるが(1)白麻地波文様胴着と同様と見做される。形も同形と見てよい。

紐附は(1)の場合は背面の腰の位置に簡単に縫い付けられていたが、この場合は挿図6の図で示した位置に、二・五センチ幅の薄く綿が入れている紐が上前下前に縫いつけられ、下前につけられた紐は左身頃の脇に紐通し穴があけてあって、そこを通して着装するようになっていて。紐幅は二・五センチで、紐丈は上前紐が八七センチ、下前紐は八八・五センチ、紐の縫目は双方とも下になっている。

中入綿は真綿である。

縫糸は、白のS燃絹糸が、表裂と表裂の縫い合わせと、表裂と裏裂との縫い合わせに用いてあり、裏裂と裏裂の縫い合わせと襟裂の縫い糸には紺S燃絹糸が用いられている。縫目(針目)は、平縫が○・三〇・四センチ、くけ目が○・五センチ前後



挿図6 (2) 三つ葉葵文様藍型染胴着

た襟である。変り網目文地に牡丹と尾長鳥文様金入縹珍で、文丈は一八センチ前後、窠間幅は一〇・二センチ、地合は経の五枚縹子地で、密度が粗く、地は経糸、緯糸ともに臙脂色がかかった茶色Z燃の糸で、一センチ間に、経糸が八〇本前後、緯糸は二二越前後である。絵緯の平金糸は上質とはいえず、一センチ間に一二本前

挿図8 金入縹珍胴着損傷分と共に一包にされていた縹ビロード襟

縫のところは織耳ではなく裁ち目であることを形状・仕立の項で述べたが、その双方の裂地は見たところも同種の裂地のように、片方は型紙使用の糊置防染の藍染に、片方は藍の無地染として表裂と裏裂に用いたようである。羽二重風の地合の平絹で、経糸、緯糸共に同じ位の太さで、製練も同程度。密度は表裂・裏裂共に、一センチ間に、経糸が五〇本前後、緯糸が四八越前後である。(染色)の項で前述したように、表裂と裏裂は、白生地には恐らく同じ種の幅の広い、少くとも四二センチ以上は幅がある裂地が用いられたと想われる。

襟裂は全長五七センチ、巾二五センチ(襟巾としては二つ打にしてあるので二一・五センチ)の一枚裂で出来

a 全体
と比較的小まかい。
(裂幅、地合・地質・襟裂・重量)
表裂も裏裂も、背

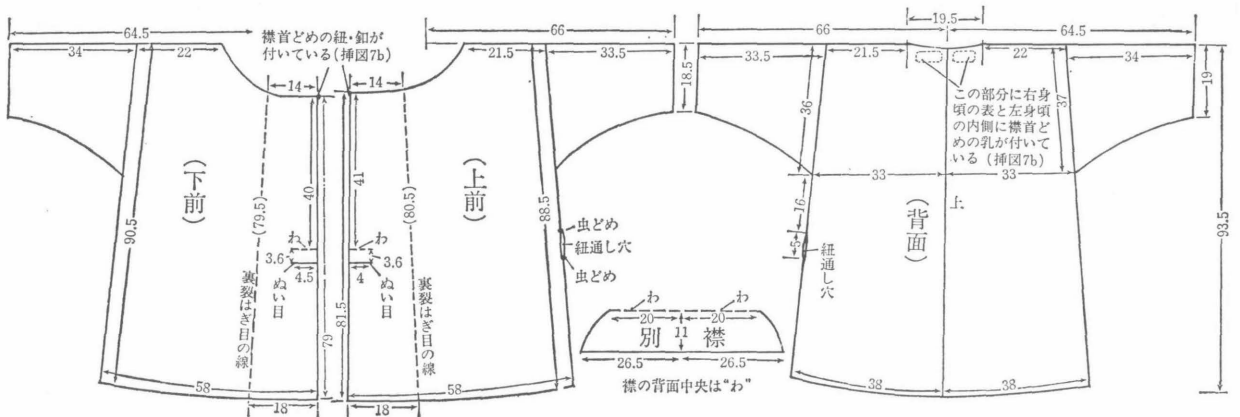
(3) 金入縹珍胴着
この胴着は、表裂の地組織の経糸がこげ茶色で、鉄媒染であったため、糸の朽損が甚だしく、写真(図版V、挿図7a、b)で見られるように、地の経糸が朽ちて粉状となって四散し、今日に伝えられた。しかし、挿図7bの右

(3) 金入縹珍胴着

この襟裂は裂の経方向に二つ折りして、その輪のところが襟の外側に、二枚の方を襟首囲りに縫いつけてある。襟の縫い糸には紺S燃絹糸が使用されている。
この胴着の重量は六〇〇グラム弱。

後入っている。金糸以外の絵緯は、萌黄、薄白茶、樺色、薄青、青の五色。牡丹の花の長径が六センチ、短径が三・二センチ、尾長鳥の長さが約六センチ。

b 部分
挿図7 金入縹珍胴着損傷時



挿図9 (3)金入縹珍胴着実測図

下方の紐の縫附部分のように、朽損していても摩擦の悪条件が少なかった箇所は、触れれば粉々になるのだが、幸い好条件下にあった為に、文様も組織も見定めることが出来る状態にある。朽損がこのようにひどいものだが、ところどころに文様や地組織が判明できる部分が残されて今日に伝えられたことは不幸中の幸といえるであろう。輪王寺ではこの胴着を何時ごろから薄紙に包み込んでいたのか不詳だが、減多に包を開くことなしに今日に至ったようである。

表裂は朽損が著しいが、裏の紅平絹は、紅染の褪色は認められるもの地質には損傷が全くないといってよい。

また、この包の中に平銀糸入り濃茶・黄土色縦縞ビロード襟(挿図8)が入っており、表裂朽損胴着の襟首囲りの寸法に合うようであったのでこの胴着の襟だとばかり思っていたが、後述するように共立女子大の研究室で、この胴着の形が整えられた上での考察では、この胴着には共襟の附いていた形跡が明らかで、その襟は幅の狭い立襟であったのか、緯糸の白い総状になったものが襟首囲りに廻ってついている。そのような次第で、この縞ビロードの襟はこの胴着につけられていた襟ではないことが判った。

この金入縞珍胴着は、筆者が輪王寺から預って来て、一通り調査をした後、共立女子大家政学部被服学教室で栗原弘子教授、河村まち子助教授らの手によって形が整えられる修理が行われた(図版Vは、地の経糸が朽損したために緯糸だけが浮いた状態になっていたのを、細い白絹糸で押えとめて整え、裏裂の形状に合わせる事が可能となった、そうした修復後の部分写真である)が、この修復時に種々と新しい知見を得たのであった。その修復に

よって当初の形状も確認されたので、ここに挿図9としてその実測図を示し、図版Vの修復後の部分写真と合わせ当初の形姿を示した。挿図7aは、伝来のまゝ手つかずの折の写真。挿図7bはその部分写真で、判明した箇所の説明を記入した。その説明図から挿図9の胴着としての何処の部分か当って、その位置等検討していただきたい。

(表裂)

鉄媒染の朽損が著しく、当初の姿を残している部分は幾ヶ所もない。茶地紗綾形に平金糸で表出の小花文、その小花文は八弁花で、花の径は一・五センチ、タテ径は一・三センチ、紗綾形は白(黄白色)で、卍の交叉する部分の直線の長さが〇・七ミリ、紗綾形の基本形は長さが二センチ、文丈は四センチ、窠間幅は八センチである。

地は経の七枚縞子で、経糸は濃茶、緯糸は白(黄白色)。地合は一センチ間に、経糸は九〇本前後、緯糸は四五越前後。絵緯は、紅、平金糸、萌黄、金糸は一センチ間に二〇本入り、この金は光沢が美しく相当に良質のものと思われる。総合的に見て、朽損が惜しまれる上質の縞珍である。

(裏裂)

紅平絹で後染。地合は、経糸は一センチ間に五〇越前後、緯糸は一センチ間に三八越前後。

(襟首どめの乳、釦等)

前合わせの襟首囲りの衽上部、釦に繋る裝飾組紐(その部分の補強も兼ねている)と、上前、下前の釦を留める乳は同一の組紐で、萌黄色に撚金糸入りの安田打紐である(挿図7b)。この撚金糸の金は、光沢がよく、金糸の芯になっている絹糸が紅染であることもあってか、輝く金の色が格調高いように見える。

註

1・2 日光山輪王寺には、寛永一三年四月一七日の二回神忌に舞楽があった史料(1)

があり、このため舞楽装束一式が調製された(II)。

(I) 「東照大権現二十一回御忌記」中に左の記録がある。

○祭礼舞楽之次第(四月十七日条)

神輿臨幸 慶雲染 還幸 還城染
於 御旅所

東遊 狛近正 同近穩 同近音 藤原葛言

蘇利古 大秦兼長 同広有 同広重 同兼護 同兼元

○御経供養左右舞染之次第并役者交名

(四月十八日条)

昨宵於神前有試染奏 三陵王納蘇利音戸 今朝寅ノ一点供 染音 神前乱声三節

次参向慶雲染 一曲 左鶏婁 伯友安

右宍鼓 太秦兼長

(後略)

(II) 「長持箱書」 輪王寺舞染装束は現在この当初の七個の長持と新調の木箱、他の箱の転用したもの等二十二個の箱他に納められている。しかしこの箱書と内容とは今では対応しなくなっているが、寛永十三丙子年四月吉日と記されている長持とその納入舞染装束の名称とは当初のものであることは確かであろう。そうした伝来のもとに今日あるそれら舞染装束の数々が染織史、服飾史の立場から見ても、寛永十三年当時の料であることは間違いないから。

3 修理の場合も復元模造の場合も、「経費は一切、各自が分担している仕事にかかる費用は各自が持つ」という方法で行った。各自が受持つ仕事の内容は、それぞれの専門分野で、その仕事が各自にとって大層な勉強になるものであるから費用は持って当然という理。今回の費用分担は次のようにした。

〈修理・調査〉 共立女子大学家政学部被服研究室は、表裂が朽損して形を成さない状態であった「金入縹珍胴着」の形成修理を行ったが、その費用の一切。東京国立文化財研究所の神谷栄子は、修理完成した胴着や調査対象の胴着二領の4×5写真撮影費・スライド撮影費・各伸し写真費用、各所への連絡通信費等一切。

〈復元模造〉 共立女子大学家政学部被服研究室と松原中形藍染工房は、型紙作成と、藍染に関する費用一切の費用を分担した。東文研の神谷は修理の時同様。

4 この襟裂には、裂地の横ぎれが用いられており、従って丈丈は襟幅の倍の寸法二四センチ内に納まらない長さであるため、不詳で、二四センチ以上となる。

5 撚金糸の芯になっている糸は通常、白や薄白茶のような自然色の物が物いられているように、この輪王寺蔵の胴着の場合も(1)白麻地波文様胴着の上前襟の釦を受ける乳の三つ組紐の一角である撚金糸の芯糸は白の絹糸のように観察された。また(2)三つ葉葵文様藍型染胴着の襟首囲りに物いられている紫に撚金糸入り安田打紐の撚金糸は芯糸は薄白茶色の絹糸(精練しない生糸カ)で、筆者がこれまでに撚金糸の芯で紅染を知っているのは、紀州東照宮蔵品の茶壺口覆に使用されている「金華山裂」の撚金糸のみである。その撚金糸の芯糸が紅染であることを発見され驚かれたのは米沢の紅花研究家鈴木孝男氏であった。